

行列のできないラーメン屋

庭鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこはどこかのラーメン屋。知る人ぞ知る店。今日もそこでは麺をすする音が聞こえる。

一発ネタです。おつまみ程度にご覧ください。

飯テロ要素はないです。

目次

行列のできないラーメン屋 | 1

行列のできないラーメン屋

麺をゆで始めてから早三十分。そろそろ頃合いであろう。

麺をあのザルみたいなやつで掬い上げ、特製スープの中にぶち込む。

その瞬間、熱された油が顔面に飛び跳ねるが、そのゴリラのような顔の男は眉一つ動かさない。

ちゆるちゆると顔に似合わず可愛くラーメンを啜った男は、満足そうに言葉を漏らした。

「うん、不味い」

ラーメン屋に似つかわしくない光景、しかしそこはラーメン屋である。

しかも行列のできないことで有名なラーメン屋である。

つまり客なんてほとんどいないのだ。

店主の癖に、このゴリラがラーメンをすすっているのがいい証拠だろう。

夜道に屋台を構え、何も知らない無垢なるトーシロを捕まえるのが今日の彼の仕事なのだ。

ザツザツザと一人のやつれた男がこの屋台に近づき始めた。

ああ、この男は人間が元来持つ生存本能を失ってしまったのだろうか？

蜘蛛の巣、いやゴリラの巣に一匹の哀れな虫が囚われてしまった。

「親父……。ラーメン一つ。」

どうやらやつれた男は、ラーメン屋の店主がラーメンを食っているという異常事態に気づけぬほど

疲労しているようだ。

ここで素直にラーメンを作るような店だったらもう少し客がいただろう！

しかし、ゴリラは閃いたといわんばかりにラーメンを食いながら話し出す。汚い。

「……あなた。どうやらすごく疲れているようだ。何かあったのか？話してみんさい。」

ゴリラは諭すように話し始めた。

しかし騙されてはいけない!!

こいつはラーメンを作るのが面倒だから時間を稼ごうとしているだけなのだ!!

その証拠にこいつ一切ラーメンを食うのを止めない!!

しかし、男は気にする余裕がないようで、ぽつりぽつりと話し出す。

「・・・ええ。私の仕事、最近余裕がなくなってるね。これを食べたらまたすぐに会社に行かなくやなんないんですよ。」

男は愚痴を聞いてもらいたかったのか、結構饒舌であった。

ゴリラはこれ幸いと会話を続ける。

「そいつは大変ですね。しかし、そんな大変な仕事とは何をやってるんです?」

「インスタントラーメンに加薬を入れる仕事をしています。」

男は、結構誇りに思っています。と小さくはにかみながら続けた。

ゴリラは加薬を知らないらしく、(・・・火薬?)と勘違いしていた。

目の前の男をテロリストだと思ったゴリラは、急にキレた。

「そんな仕事!!やめてしまえばいいんですよ!!!」

夜の街にゴリラの声が響く。

目の前の男はハツとしたようにゴリラを見た。

そりやそうだ。いきなりそんなこと言われれば。

「・・・そうか。こんなに疲れるなら辞めてしまうのもいいか!!というかなぜ我々は手作業で入れているんだ!!機械でやればいいじゃないか!!」

しかし、男は疲れ切っていた。疲労が蓄積しすぎていたのだ。

男はゴリラの力強い色黒の手を取り、感激したように話し出す。

「ありがとうございます!!店主さん!!今すぐ会社に戻ってこのことを話し合わなくては
!!

申し訳ありませんが、行かせていただきます!!代金いくらですか!?

「あ、ラーメン一杯7百万円です。」

足音が夜の街に消えると、そこは元通り行列のできないラーメン屋だった。

結局疲れた男は、時そばもびつくりの支払いに気づかなかった。

いや多分、元から頭が弱いのか・・・?

しかしゴリラは急に7百万円もの大金を手に入れて満足だった。

いやはや、これで何をしてやろうか。

やはりまずは・・・女だな!

ゴリラの世界に貨幣制度があるとは思えないが、なぜか満足げに笑っていた。

その後、ゴリラは逃げ出した動物園に捕獲され、人語を解するゴリラとして人気者になつていた。

しかし、ゴリラは今夜も動物園を後にする。

行列のできないラーメン屋。どこにでも現れるラーメン屋。

貴方の町にも、きっとゴリラは現れる。